

愛媛県のカンキツにおける重要害虫

金崎秀司

愛媛県農林水産研究所果樹研究センター

本県のカンキツは、長い海岸線に沿ったベルト地帯と瀬戸内海に浮かぶ島々であり、その大部分が急傾斜地を切り開いた段畑である。品種は、温州みかんや伊予柑、不知火が中心であり、近年、紅まどんなや甘平等新品種への転換も進んでいる。そんな中、防除場面では次の二つの特徴がある。

一つは、多目的スプリンクラーによる広域一斉防除の普及である。これにより、近隣の海では養殖業も盛んであることから、特に低魚毒性の薬剤を求める声が多い。もう一つは、同一・隣接園で複数のカンキツ品種が栽培されている場合が大部分である、という点である。このため、本県の防除指針では、「みかん」ではなく「カンキツ」登録のある薬剤しか採用していない。

このような特徴のため、黒点病防除のマンゼブ剤散布時に併せて殺虫剤を混用する場面が多く、また、使用する殺虫剤も低魚毒性のネオニコチノイド剤が中心となる。この防除体系下では、本剤の効果が高い訪花害虫、アブラムシ類、ゴマダラカミキリ、チャノキイロアザミウマ等の害虫は問題になる場面が少なく、逆に、効果が低く、防除時期も限定されるカイガラムシ類（特にヤノネカイガラムシやフジコナカイガラムシ）は、問題となる場面が多い。さらに、ダニ類（特にミカンサビダニ、チャノホコリダニ）に効果の高い薬剤には、高魚毒性の剤が多く、これらダニ類も問題になる。

以上は、カンキツ防除暦の定期防除の対象として、古くから知られる害虫である。本講演では、近年、増加傾向にあり、応急防除が必要になってきた重要な害虫三種（クワゴマダラヒトリ、カネタタキ、ハナアザミウマ）の被害・発生の現状や防除上の問題点等を紹介したい。

・クワゴマダラヒトリ：県中部から北東部、島嶼部の中晩柑産地を中心に問題となっている。毛虫の仲間で、春先に隣接する雑木林からカンキツ園に進入し、新芽や蕾を食害する。カンキツ放任園の増加に伴い、そこで増えるアカメガシワ（産卵樹）が発生源となる。訪花害虫防除に使われるネオニコチノイド剤の効果が低く、カーバメート剤、合成ピレスロイド剤等での応急防除が必要となる。

・カネタタキ：県南部の温州みかん産地で、問題となっている。コオロギやスズムシ等の仲間ではあるが、本種は樹上生活をする点で異なる。幼・成虫とも果実を食害し、多発時には落果被害が多数みられる。ネオニコチノイド剤の効果が比較的低いため、常発園では合成ピレスロイド剤等での応急防除が必要となる。

・ハナアザミウマ：全県的にカンキツ産地で、品種を問わず問題となっている。着色期以降の果実を、成・幼虫が食害し、多発時には腐敗被害に繋がる。収穫間際に加害されるため、摘果で対応できない。また、ネオニコチノイド剤には有効な剤があるものの、収穫前日数の制限があり、使用できる薬剤が少なく、カーバメート剤、合成ピレスロイド剤等での応急防除が必要となる。

Major Pest of Citrus Fruit in Ehime Prefecture

Shuji kanazaki

Ehime Reserch Institute of Agriculture, Forestry and Fisheries Fruit Tree Research Center